ありふれた手法

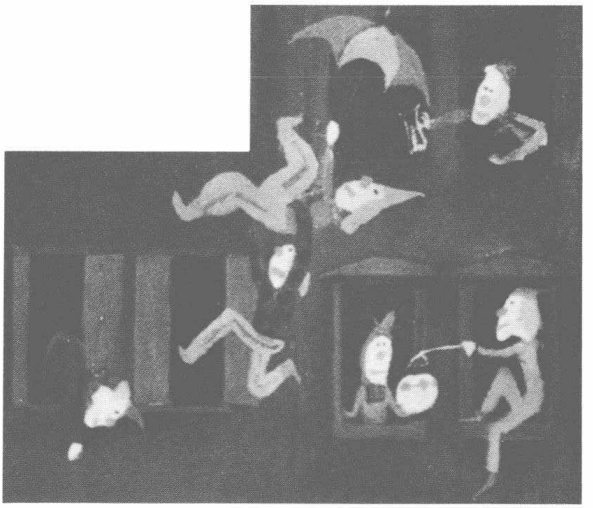
星 新一

1980

新潮社

れた手法

星 新一



新潮社

ありふれた手法（しゅほう）

印刷　1981年6月5日
発行　1981年6月10日
著者　星（ほし）　新一（しんいち）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71
振替　東京4－808
電話　業務部(03)266-5111
編集部(03)266-5411
印刷所　株式会社　光邦
製本所　株式会社　大進堂

定価　780円
© Shin'ichi Hoshi, 1981 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

総合診断所……7
捨てる神……12
風と海……20
石柱……30
あの星……38
吉と凶……42
天使……50
名前……55
山道……61
数学の才能……68
夜の山道で……77
監視員……81
職業……87
振興策……94
レラン王……102
ある土地で……112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

異端……117
サイドビジネス……124
てがかり……133
仲間……139
ふりむいた顔……148
湖で……153
交錯……160
決断……164
波長……173
あるいは……181
忘れ物……184
一流のカジノ……190
ありふれた手法……203
現象……211

装画・カット　横山隆一

ありふれた手法

総合診断所

ドアから三十歳ぐらいの女性が入ってきて、口ごもりながら言った。
「あの、そとの看板の〝人生総合診断所〟というのが目に入ったので。それと、いいかげんでないような印象も受けましたし……」
四十歳を少し越えたここの所長は、そばの椅子をすすめながらにこやかに迎えた。
「よくおいで下さいました。こここそ時代の要求によって生れた、新しい機構といっていいでしょう。ユニークなシステムです。わたしは正式に医師の資格を取っています。ですから、医学的な診断をも下せるのです」
「あら、病院でしたの、ここ……」
「そう限定されては困ります。わたしが医学部門の担当というわけです。お話をうかがって法律がからんでいるとなれば、その部門の人をご紹介します。また経済的なこと、職務上の不満など、それぞれの専門家がそろっております。そもそも、この複雑な世の中、いかに優秀な人でも、ひとりの力は知れております。そこで、いかなることにも対応できるよう、この機構が生れたわけです」

そう言われ、女はたのもしさを感じた。
「どんな相談でもできるのね」
「はい。正確な診断をいたします。それにもとづくアドバイスもいたしますが、百パーセントご満足いただけるまで至っていない。そのため、相談所という看板を出さずにいるのです」
「でも、ほとんどうまくいってるんでしょう」
「そうですとも。で、お悩みは。家計ですか、運動不足ですか」
「あたしじゃなく、亭主についてですの」
「なにか、よからぬことを……」
「いいえ。まともで、平凡に会社づとめをしていますわ。酒もやらず、かけごとも」
「けっこうではありませんか」
「まあ、聞いて下さい。あたしたち、まだ子供がありませんの。それはいいんですけど、せっかくの休日になると、人が変ったようになって……」
女はため息をつき、所長はうながした。
「あばれたりなさるのですか」
「その逆なんです。妄想の世界にこもってしまうのです。どうやらそこでは、亭主は発明家で、妻に生活の苦労をかけながらなにかに熱中し、それが生きがいらしいんです」
「あまり例がありませんな。ご本人をくわしく診断させて下さい。つぎの休日におうかがいしましょうか」
「お願いしますわ」
というわけで所長は往診し、その結果を女に告げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ご主人は、本当に自分を発明家だと思い込んでいて、会社づとめのほうは夢のようなものだと思っておいでだ。かなりの重症で、なおるかどうか」
「となると、あたしも決心すべきかもしれないわね。別れて、早く、もっとましな人をさがしたほうが賢明ね。住居は賃貸マンションだから、解約すればいいし、あたしも生活費ぐらいはかせげる。だけど……」
女は言葉につまり、所長はそのあとをつづけた。
「ご亭主の始末のことでしょう。ご心配なく。当方で引き受けます。離婚の手続きもおまかせ下さい。もっとも、かわりの魅力的男性のお世話までやってさしあげられないのが残念ですが……」
「そこまではお願いできないわ。いろいろとありがとう。助かったわ」
女は肩の荷がおろせてすっきりしたといった表情で、喜んで帰っていった。
半年ほどたって、女はふたたびやってきた。所長は迎えて言った。
「また、なにか問題でも……」
「いいえ、前にあたしと別れた亭主、そのご、どうなったかと思って。気になったので寄ってみたの。あれこれいえた義理じゃないけど、巧妙に消しちゃったんじゃないでしょうね」
「とんでもない。そんな悪評をひろめられては迷惑です。そんなにご心配なら、現状をごらんにいれますよ……」
所長は女を車に乗せ、郊外へ出て、ある一軒家の手前でとめた。そして、指さす。そこを見て、女は言った。
「あら、いたわ。奥さんらしい人といっしょね。子供もいるじゃないの。四歳ぐらいの女の子ね。

なんだか、うまくいってるみたいね。どうなってるの」
「うちの機構は、各所に支部があるのです。いろんなのが持ち込まれますよ。たとえば、ワイフが発明狂の夫人という妄想にとりつかれた、なんとかならないかなんて相談もね。そこで引き取って……」
「あの子は連れ子なの……」
「いいえ、自分の両親を信じないんです。こんな平凡な人じゃなく、もっと優秀な発明家のはずだと。親は持てあまし……」
「それらをまとめて面倒みてるってわけね。大変な資金がいることになるわね」
「資金を必要とはしますが、慈善団体とはちがいます。あなたのもとのご亭主、これで当人にとって望ましい状態になれたわけです。あの妻子たちも、無形の協力をしてくれた。そのあげく、二十分あればローラースケートで走れるようになる練習機を完成した」
「あ、あの、いま売れている品……」
「そうです。改良すれば、水泳練習機、サーフィン練習機も出来るでしょう。わが機構もいままでの費用を回収し、現在、利益の一部をいただいているわけです。捨てる神あれば助ける神ありが、当方の方針でして……」
そこからの帰りの車のなかで、女はしばらく考えてから言った。
「あたし、このあいだから、芸術家の奥さんになったような気がときどき……」
「その件は、事務所に戻ってからにしましょう……」
診断所へ帰りつき、所長が本部へ問い合わせると、データーが送られてきた。それを女に告げる。

「ストックがありましたよ。入荷したてですが。いやがる奥さんを人前に引っぱり出し、はだかにし、絵具をぬりたくった男です。奥さんが困りはて、持ち込んできたのです。うちの芸術部門の担当者は、いい点をつけてるようですがね。いかがでしょう」
「いやよ、そんなの」
女は断わり、帰っていった。しかし、五カ月もすると、その芸術家なる人物は有名になり、何人ものモデルを使い、外国で個展をして回るようになった。
女はまたも立ち寄って所長に言った。
「惜しいことをしたわ」
「ですから、あの時、おすすめしたでしょう。チャンスでしたのに」
「そうだったわね。あたしって、運がないのね」
「正確には、ちょっとちがうんですがね」
「なんなの」
女に聞かれ、男は言った。
「申し上げにくいんですけど、つまり、あなたはまともすぎるんです」

捨てる神

その青年がマンションの屋上でぼんやり遠くを眺めていると、名前を呼ばれた。ふりむくと、四十歳ぐらいの男が、そばに立っていた。見知らぬ顔。青年は聞く。

「どなたですか」

「お会いできてよかった。おたくへうかがったら、お母さんが、たぶん屋上でしょうとおっしゃったので、ここへあがってきたのです。わたしは、こういう者で……」

渡された名刺を見て、その人物は経営コンサルタントの事務所の所長とわかった。青年は言う。

「むずかしいお仕事なんでしょうね」

「簡単ではありませんが、なれれば面白く感じるようになります」

「で、ぼくにご用なのですか」

「ええ。突然こんなことを申しては失礼かもしれませんが、うわさによると、あなたは大学卒業をひかえ、就職のための入社試験をどこも落ちたとか」

「うわさでなく、事実です。あまり自慢できることではありませんがね。話題にされてひろまっているとはなあ」

青年は顔をしかめ、にが笑いをして頭をかいた。思いつめて、ここから飛びおりようという気は、ぜんぜんないらしい。晴れた空のように、あっけらかんとしている。しかし、困ったことだとは感じているようだ。男は聞く。

「どうして、そんなことになったのでしょう」

「つまり、ぼくは、だめ人間なんですね。社会にむかないのです」

「しかし、大学に入れた」

「そもそもは、そこがなにかのまちがいだったのでしょう。偶然です。学生だと、だめの程度がわからない」

「そういうことはいえますね」

「あるいは、入学してまもなく、なにかにとりつかれたのかもしれない」

「なにかです」

「昔からあるでしょう。キツネとか、祖先の霊とか。精神の空白の時に、そっととりつくんです。ぼくの場合、これ以下はないという、つまらぬものにとりつかれた。クラゲか、ばか殿さまの霊か……」

青年の珍説に、男は感心した。

「すばらしい想像力じゃありませんか」

「想像力は、実務に不要なのです。いや、原因はべつかもしれない。かぜみたいな病気で高熱を出したことがありますが、その時、いくつかの脳細胞がこわれたのかもしれない。とにかく、入社試験は第一次のテストの段階で、すべて落ちた。三流どころか、五流ぐらいの会社もね」

「徹底したものですね」

「ぼくの文章か、字か、そんなものから、こいつはだめだとの印象を、だれもが受けるのかもしれない。人ちがいで、のろいがこっちに回ってきたのかな」
「まさか」
「しかし、現実なんです。職にありつけない。珍しいことなんでしょうが……」
青年はまたも頭をかく。男は大きくうなずき、こう言った。
「どうでしょう。うちの事務所へ来て、テストを受けてみませんか。結果によっては、所員になってもらいます」
「ご好意はありがたいが、たぶん、だめでしょう。これだけの前例からみて」
「やってみなければ、わかりませんよ。ぜひ、ためしに。交通費と日当、つまり謝礼をお払いしますから」
「どうせひまなんですから、そうしますか」
青年はその男についていった。経営コンサルタントともなると、だめ人間の研究もしておこうというわけか。
その事務所は、新しいビルのなかにあった。所員は十人ほど。みな忙しそうに仕事をしていた。
男は青年に言う。
「では、テストにかかりますか。参考のため、脳波測定機を使わせてもらいます」
「かまいませんよ」
頭や手や、各所に電極がとりつけられ、コードが装置にのびている。青年は与えられたテスト用紙にむかい、問題への答えや意見や感想を書いていった。不合格の連続だが、なれてはいるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com